

ことば

は

キリスト論に
ついての
リゴニア声明

人と

なられた

ことばは 人となられた

キリスト論に
ついての
リゴニア声明



LIGONIER MINISTRIES

ことばは人となられた

キリスト論についてのリゴニア声明

(The Word Made Flesh: The Ligonier Statement on Christology)

Copyright © 2016 by Ligonier Ministries

Second edition

Published by Ligonier Ministries

421 Ligonier Court, Sanford, FL 32771

Ligonier.org | ChristologyStatement.com

引用聖句は全て、聖書 新改訳2017 © 2017新日本聖書刊行会

許可を得て使用。無断転載禁止。

ISBN 978-1-64289-488-2

イエス・キリストとはどのようなお方か。成人であればほぼ誰もが、イエスについて何らかの考えを持っていることだろう。その考えは皮相的なものかもしれないし、無知に基づくものかもしれない。あるいは全く異端的なものかもしれない。しかし、イエスについての真理は、単なる考えでは済まされない重大事であり、永遠に関わるものである。

「クリスチャン」と自称する者は、キリストの弟子としてキリストに従うと公言している。彼らは、自身のキリストについての見方を反映したキリスト論 — キリストに関する教理 — を持っているのである。この考えは暗に示されている場合もあれば、明確に表明されている場合もあるだろう。それは聖書の啓示の深みと、聖書に対する歴史的キリスト教の考察を表現しているかもしれないし、奇抜で、神のことばからかけ離れたものかもしれない。しかし、クリスチャンであると公言する者に、キリスト論を持たない者はいない。

キリストに従うことは、キリスト教の中心的要素である。そのため、教会は何世紀にも渡って、想像の産物に過ぎない独自のキリストではなく、歴史的・聖書的キリストについて告白しようと努めてきた。歴史的な声明には、ニカイア信条、カルケドン信条、ハイデルベルク教理問答、ウェストミンスター信仰告白などがあり、これらはキリストに関する聖書的な教えを明確に表現するものである。

今日、このような声明はしばしば軽視され、また誤解され、その結果キリストの人格とその御業 (the person and work of Christ) について、混乱が広がっている。「キリスト論についてのリゴニア声明」は、キリストの栄光のために、また神の民の教化のために、キリスト教会の歴史的・正統的・聖書的キリスト論を凝縮し表現したものである。この声明を作るにあたって、告白しやすいものであること、教会の永続的な信仰を教えるのに役立つものであること、そして異なる教会の信仰者が共に宣教に邁進するための共通の告白として用いられるものであることを追い求めた。この声明は、教会の歴史的な信条や信仰告白に取って代わるものではなく、それらを補うものである。すなわち、キリストがどのようなお方で、何をしてくださったかについて、総合的に教えるためのものである。キリストによって、この声明が神の国ために用いられることを祈りつつ。

受肉したもう神の御子、私たちの預言者、祭司、王の御名によって、

R・C・スプロール

2016年、春

私たちは、神が人となられたという
奥義と驚くべき御業を告白し、
私たちの主、イエス・キリストによる
この偉大なる救いを喜ぶ。

父なる神と聖霊とともに、
御子は万物を創造し、
万物を保ち、
万物を新しく造り変えられる。
キリストは真の神でありながら、
真の人となり、
一つの位格のうちに二つの本性を持たれた。

キリストは処女マリアより生まれ、
私たちの間に住まれ、
十字架につけられ、死んで葬られ、
三日目によみがえり、
天に昇られた。
そしてさばきのために、栄光のうちに再び来られる。

キリストは私たちのために、
律法を遵守し、
罪のための贖いとなり、
神の怒りを余すところなく受けられた。
主は私たちの汚れた衣を取り、
ご自身の義の衣を与えてくださった。

キリストは私たちの預言者、祭司、王である。
キリストはご自身の教会を建て、
私たちのためにとりなし、
万物を治めておられる。

イエス・キリストは主である。
主の聖なる御名を、私たちは永遠にほめたたえる。

アーメン。

確認と 否定

参照聖句とともに

第一条

私たちは、イエスが、歴史において受肉された永遠なる神の御子、すなわち聖なる三位一体の第二位格であることを確認する。イエスは、神の約束のメシヤ、キリストである。¹

私たちは、イエス・キリストが単なる人であった、または初代キリスト教会が造り上げた想像上の人物であったということを否定する。

第二条

私たちは、神性の一体性において、永遠に生まれる御子は、御父と聖霊と同質(homoousios)であり、同格であり、共に永遠であることを確認する。²

私たちは、御子は単に神に似ている(homoiousios)、あるいは単に御父の養子とされたということを否定する。私たちは、存在的三位一体において、御子が御父に永遠に従属するということを否定する。

1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。…ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた(ヨハネ1:1, 14)。以下の聖句も参照のこと。詩篇110:1; マタイ3:17; 8:29; 16:16; マルコ1:1, 11; 15:39; ルカ22:70; ヨハネ4:25-26; 使徒5:42; 9:22; ガラテヤ4:4; ビリビ2:6; コロサイ2:9; ヘブル5:7; 一ヨハネ5:20。

2 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け…(マタイ28:19)。以下の聖句も参照のこと。ヨハネ1:18; 3:16-18; 10:30; 20:28; コリ13:14; エペソ人への手紙2:18。

第三条

私たちは、ニカイア信条およびカルケドン信条に基づいて、イエス・キリストが真の神であり、真の人であること、一つの位格の中に二つの本性が永遠に結合されていることを確認する。³

私たちは、御子が被造物であるということを否定する。私たちは、御子が神でなかった時があったということを否定する。私たちは、歴史における御子の受肉以前からイエス・キリストの人のからだとして魂が存在していたということを否定する。

第四条

私たちは、位格的結合を確認する。すなわち、イエス・キリストの二つの本性がキリストの一つの位格のうちに、混同することなく、混ぜ合わされることなく、分割されることなく、引き離されることなく、結合していることを確認する。⁴

私たちは、これら二つの本性を区別することは、それらを引き離すことであるということを否定する。

3 キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています(コロサイ2:9)。以下の聖句も参照のこと。ルカ1:35; ヨハネ10:30; ローマ9:5; 一テモテ3:16; 一ペテロ3:18。

4 シモン・ペテロが答えた。「あなたは生ける神の子キリストです。」すると、イエスは彼に答えられた。「バルヨナ・シモン、あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です」(マタイ16:16-17)。以下の聖句も参照のこと。ルカ1:35, 43; ヨハネ1:1-3; 8:58; 17:5; 使徒20:28; ローマ1:3; 9:5; 二コリ8:9; コロサイ2:9; 一テモテ3:16; 一ペテロ3:18; 黙示1:8, 17; 22:13。

第五条

私たちは、イエス・キリストの受肉において、キリストの神の本性と人の本性は各々の属性を保持していることを確認する。私たちは、両方の本性の属性がイエス・キリストという一つの位格に属していることを確認する。⁵

私たちは、イエス・キリストの人の本性が神の属性を持つ、または神の本性を含むことができるということを否定する。私たちは、(キリストの)神の属性が、神の本性から人の本性に交流するということを否定する。私たちは、御子が受肉において神の属性を捨てた、または放棄したということを否定する。

第六条

私たちは、イエス・キリストが目に見える神の御姿(かたち)であり、真の人の本性の基準、本来の姿であり、贖いにおいて私たちが最終的にキリストと同じ姿に造り変えられることを確認する。⁶

私たちは、イエス・キリストが十分に真の人でなかったということ、単に人のように見えただけであったということ、理性的な人の魂を持っていなかったということを否定する。私たちは、位格的統合において、御子が人の本性ではなく人の人格のみを受け取られたということを否定する。

5 キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ…(ピリピ2:5-7)。以下の聖句も参照のこと。マタイ9:10; 16:16; 19:28; ヨハネ1:1; 11:27, 35; 20:28; ローマ1:3-4; 9:5; エペソ1:20-22; コロサイ1:16-17; 2:9-10; 一テモテ3:16; ヘブル1:3, 8-9; 一ペテロ3:18; 二ペテロ1:1。

6 御子は、見えない神のかたちであり、すべての造られたものより先に生まれた方です。なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、御子のために造られました(コロサイ1:15-16)。以下の聖句も参照のこと。ローマ8:29; 二コリ4:4-6; エペソ4:20-24; ヘブル1:3-4。

第七条

私たちは、イエス・キリストが真の人として、キリストの謙卑の状態において、人の本性のあらゆる自然の限界と共通の弱さを持っていたことを確認する。私たちは、キリストが、すべての点で、しかし罪は別として、私たちに似た姿になられたことを確認する。⁷

私たちは、イエス・キリストが罪を犯したということを否定する。私たちは、イエス・キリストが苦難、誘惑、困難を真に経験していないということを否定する。私たちは、罪が真の人性に本来備わっているものであるということ、またはイエス・キリストに罪がないこととキリストが人であることが両立し得ないということを否定する。

第八条

私たちは、歴史的なイエス・キリストが、聖霊の力により、奇跡のうちに宿り、処女マリアより生まれたことを確認する。私たちは、カルケドン信条に記されている通り、マリアは神の母(theotokos)と呼ばれるにふさわしく、彼女の身ごもった子は受肉した神の御子、聖なる三位一体の第二位格であることを確認する。⁸

私たちは、イエス・キリストがその神性をマリアから受けたこと、またはキリストの無罪性がマリアに由来するということを否定する。

7 したがって、神に関わる事柄について、あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それで民の罪の宥めがなされたのです。イエスは、自ら試みを受けて苦しめられたからこそ、試みられている者たちを助けることができるのです(ヘブル2:17-18)。以下の聖句も参照のこと。ミカ5:2; ルカ2:52; ローマ8:3; ガラテヤ4:4; ピリピ2:5-8; ヘブル4:15。

8 さて、その六か月目に、御使いガブリエルが神から遣わされて、ガリラヤのナザレという町の一人の処女のところに来た。この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった(ルカ1:26-27)。以下の聖句も参照のこと。マタイ1:23; 2:11; ルカ1:31, 35, 43; ローマ1:3; ガラテヤ4:4。

第九条

私たちは、イエス・キリストが最後のアダムであり、最初のアダムが失敗したすべての点で、ご自身に委ねられた任務を果たしたこと、そしてイエス・キリストが神の民、すなわちキリストのからだの、かしらであることを確認する。⁹

私たちは、イエス・キリストが墮落した人の本性を引き受けられた、または原罪を受け継がれたということを否定する。

9 こういうわけで、ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がったと同様に — 実に、律法が与えられる以前にも、罪は世にあったのですが、律法がなければ罪は罪として認められないのです。けれども死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々さえも、支配しました。アダムは来るべき方のひな型です。しかし、恵みの賜物は違反の場合と違います。もし一人の違反によって多くの人が死んだのなら、神の恵みと、一人の人イエス・キリストの恵みによる賜物は、なおいっそう、多くの人に満ちあふれるのです。また賜物は、一人の人が罪を犯した結果とは違います。さばきの場合は、一つの違反から不義に定められましたが、恵みの場合は、多くの違反が義と認められるからです。もし一人の違反により、一人によって死が支配するようになったのなら、なおさらのこと、恵みと義の賜物をあふれるばかり受けている人たちは、一人の人イエス・キリストにより、いのちにおいて支配するようになるのです。こういうわけで、ちょうど一人の違反によってすべての人が不義に定められたのと同様に、一人の義の行為によってすべての人が義と認められ、いのちを与えられます。すなわち、ちょうど一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、一人の従順によって多くの人が義人とされるのです。律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。しかし、罪の増し加わるどころに、恵みも満ちあふれました。それは、罪が死によって支配したように、恵みもまた義によって支配して、私たちの主イエス・キリストにより永遠のいのちに導くためなのです（ローマ5:12-21）。以下の聖句も参照のこと。一コリ15:22、45-49；エペソ2:14-16；5:23；コロサイ1:18。

第十条

私たちは、イエス・キリストによる積極的・消極的従順を確認する。すなわち、キリストは完全なる地上での歩みにおいて律法の求める義を私たちの代わりに完全に成就したこと、そして私たちの罪の刑罰を十字架上で負われたことを確認する。¹⁰

私たちは、イエス・キリストがいかなる時点でも神の律法に従うことができなかった、または律法を果たすことができなかったということを否定する。また、イエス・キリストが道德律法を廃棄したということを否定する。

第十一条

私たちは、イエス・キリストが十字架上で、神の民の罪に対する刑罰の代償の贖いとしてご自身を捧げ、神の怒りを宥め、神の義を満たし、罪と死とサタンに勝利したことを確認する。¹¹

私たちは、イエス・キリストの死がサタンへの身代金の支払いであったということを否定する。私たちは、イエス・キリストの死が単なる先例、サタンに対する単なる勝利、または神の道德的統治を単に示すだけのものであったということを否定する。

10 すなわち、ちょうど一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、一人の従順によって多くの人が義人とされるのです(ローマ5:19)。以下の聖句も参照のこと。マタイ3:15; ヨハネ8:29; 二コリント5:21; ビリビ2:8; ヘブル5:8。

11 神はの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。すなわち、ご自分が義であり、イエスを信じる者を義と認める方であることを示すため、今この時に、ご自分の義を明らかにされたのです(ローマ3:25-26)。以下の聖句も参照のこと。イザヤ53; ローマ5:6, 8, 15; 6:10; 7:4; 8:34; 14:9, 15; 一コリ15:3; エペソ5:2; 一テサ5:10; 二テモテ2:11; ヘブル2:14, 17; 9:14-15; 10:14; 一ペテロ2:24; 3:18; 一ヨハネ2:2; 3:8; 4:10。

第十二条

私たちは、二重の転嫁の教理を確認する。すなわち、私たちの罪がイエス・キリストに転嫁され、キリストの義が信仰によって私たちに転嫁されていることを確認する。¹²

私たちは、罪が裁かれずに見過ごされるということを否定する。私たちは、イエス・キリストの積極的従順が私たちに転嫁されていないということを否定する。

第十三条

私たちは、三日目に、イエス・キリストが死からよみがえり、肉の姿で多くの人に見られたことを確認する。¹³

私たちは、イエス・キリストが単に死んだように見えただけであること、またはキリストの霊だけがよみがえったこと、またはキリストの復活はキリストを信じる者の心の中でだけ起こったことであるということを否定する。

12 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです(二コリ5:21)。以下の聖句も参照のこと。マタイ5:20; ローマ3:21-22; 4:11; 5:18; 一コリ1:30; 二コリ9:9; エペソ6:14; ビリビ1:11; 3:9; ヘブル12:23。

13 私があなたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです(一コリ15:3-5)。以下の聖句も参照のこと。イザヤ53; マタイ16:21; 26:32; 28:1-10; ヨハネ21:14; 使徒1:9-11; 2:25, 32; 3:15, 26; 4:10; 5:30; 10:40; ローマ4:24-25; 6:9-10; エペソ4:8-10。

第十四条

私たちは、イエス・キリストがその高挙の状態において、復活の初穂となられたこと、罪と死に打ち勝ったこと、そして私たちもまた、キリストと結合し復活することを確認する。¹⁴

私たちは、イエス・キリストの栄光に満ちた復活の身体が、園の墓に葬られた身体と全く違うものであったということを否定する。私たちは、私たちの復活が、私たちのからだからかけ離れた霊のみの復活であるということを否定する。

第十五条

私たちは、イエス・キリストが昇天し父なる神の右の座につかれたこと、今も王として治めておられること、そして目に見えるかたちで力と栄光のうちに再び来られることを確認する。¹⁵

私たちは、イエス・キリストが再臨の時期について誤っていたということを否定する。

14 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。…「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか」(一コリ15:20, 55)。以下の聖句も参照のこと。ローマ5:10; 6:4, 8, 11; 10:9; 一コリ15:23; 二コリ1:9; 4:10-11; エペソ2:6; コロサイ2:12; 二テサ2:13; ヘブル2:9, 14; 一ヨハネ3:14; 黙示14:4; 20:14。

15 そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。「主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」イエスは彼らに言われた。「いつとか、どんな時とかいふことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」こう言うてから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。すると見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らのそばに立っていた。そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります」(使徒1:6-11)。以下の聖句も参照のこと。ルカ24:50-53; 使徒1:22; 2:33-35; エペソ4:8-10; 一テモテ3:16。

第十六条

私たちは、イエス・キリストがペンテコステの日にご自身の霊を注がれたことを確認する。すなわち、今の時代において万物を支配し、神の民のためにとりなし、御自身が唯一のかしらである教会を建てておられることを確認する。¹⁶

私たちは、イエス・キリストがローマの司教をご自身の代理として任命したこと、またはイエス・キリスト以外の人物が教会のかしらになることができるということを否定する。

第十七条

私たちは、イエス・キリストがすべての人々を裁くために栄光のうちに再び来られ、最終的にすべての敵に打ち勝ち、死を滅ぼし、キリストが義をもって支配される新しい天と新しい地をもたらすことを確認する。¹⁷

私たちは、イエス・キリストの最終的な再臨が紀元後七十年に起こったこと、そしてキリストの再臨およびそれに付随する出来事は象徴的なものと見なすことを否定する。

16 また、神はすべてのものをキリストの足の下に従わせ、キリストを、すべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられました(エペソ1:22)。以下の聖句の参照のこと。使徒2:33; 一コリ11:3-5; エペソ4:15; 5:23; コロサイ1:18。

17 そしてイエスは、ご自分が、生きている者と死んだ者のさばき主として神が定めた方であることを、人々に宣べ伝え、証しするように、私たちに命じられました(使徒10:42)。以下の聖句も参照のこと。ヨハネ12:48; 14:3; 使徒7:7; 17:31; ニテモテ4:1, 8。

第十八条

私たちは、主イエス・キリストの名を信じる人は神の永遠の御国に招き入れられること、しかしキリストを信じない人は地獄で意識のあるままで永遠の罰を受けることを確認する。¹⁸

私たちは、すべての人が救われるということを否定する。私たちは、イエス・キリストを信じないまま死んだ人が消滅するということを否定する。

第十九条

私たちは、世界の基が据えられる前からイエス・キリストにあって選ばれた人、また信仰によってキリストと結合された人はみな、キリストとの交わり、そして互いの交わりを楽しむことを確認する。私たちは、イエス・キリストのうちにある私たちが、義認、子とされること、聖化、栄化を含む、すべての霊的な祝福を楽しむことを確認する。¹⁹

私たちは、イエス・キリストとその救いの御業を引き離すことができるということを否定する。私たちは、イエス・キリストの救いの御業に、私たちがイエス・キリストご自身から離れてあずかることができるということを否定する。私たちは、イエス・キリストと結合しながら、キリストのからだである教会とは結合されていないということを否定する。

18 人の子は御使いたちを遣わします。彼らは、すべてのつまずきと、不法を行う者たちを御国から取り集めて、火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざりするので。そのとき、正しい人たちは彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい(マタイ13:41-43)。以下の聖句も参照のこと。イザヤ25:6-9; 65:17-25; 66:21-23; ダニエル7:13-14; マタイ5:29-30; 10:28; 18:8-9; マルコ9:42-49; ルカ1:33; 12:5; ヨハネ18:36; コロサ1:13-14; ニテサ1:5-10; ニテモテ4:1, 18; ヘブル12:28; ニペテロ1:11; 2:4; 黙示録20:15。

19 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです(一コリ12:13)。以下の聖句も参照のこと。ヨハネ14:20; 15:4-6; ローマ6:1-11; 8:1-2; 12:3-5; 一コリ1:30-31; 6:15-20; 10:16-17; 12:27; ニコリ5:17-21; ガラテヤ3:25-29; エペソ1:3-10, 22-23; 2:1-6; 3:6; 4:15-16; 5:23, 30; コロサイ1:18; 2:18-19。

第二十条

私たちは、信仰のみによる義認の教理を確認する。すなわち、神は、神の恵みの御業のみによって、他でもないイエス・キリストの人格と御業に対する私たちの信仰のみを通して、私たちの個人的な功績や行いによらずに、私たちを義と宣言してくださることを確認する。私たちは、信仰のみによる義認の教理を否定することは、福音を否定することであるということを確認する。²⁰

私たちは、義認が私たちに注入される恵みに基づいているということを否定する。私たちは、本質的に義なる者となって初めて義と認められるということを否定する。私たちは、この義認が、今もこれからも、私たちの真実に基づいているということを否定する。

20 こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています(ローマ5:1)。以下の聖句も参照のこと。ルカ18:14; ローマ3:24; 4:5; 5:10; 8:30; 10:4, 10; コリ6:11; ニコリ5:19, 21; ガラテヤ2:16-17; 3:11, 24; 5:4; エペソ1:7; テトス3:5, 7。

第二十一条

私たちは、聖化の教理を確認する。すなわち神が、聖霊の力によって、イエス・キリストの御業に基づいて、罪の支配の力から私たちを救い出し、私たちを聖別し、私たちをますますキリストと同じ姿に変えていくことによって私たちをきよくされることを確認する。私たちは、聖化が神の恵みによる御業であり、義認と密接不可分に結びついており、しかし同時に義認とは異なるものであることを確認する。私たちは、聖化という神による御業において、私たちはただ受け身でいるだけでなく、罪に死に、主に従順に生きるために絶えず努め、用意された恵みの手段を私たちに当てはめる責任があることを確認する。²¹

私たちは、人が聖化におけるイエス・キリストとの結合の実を直ちに結ばないまま義と認められるということを否定する。私たちは、私たちの良い業がイエス・キリストにあって神に受け入れられるものであっても、その良い業が義認をもたらす功績となることを否定する。私たちは、罪が私たちを支配していないとしても、現在のいのちにおいては内在する罪との戦いがなくなるということを否定する。

21 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方において私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとしたのです(エペソ1:3-4)。以下の聖句も参照のこと。ヨハネ17:17; 使徒20:32; ローマ6:5-6, 14; 8:13; 一コリ6:11; ニコリ7:1; ガラテヤ5:24; エペソ3:16-19; 4:23-24; ピリピ3:10; コロサイ1:10-11; ニテサ2:13; ヘブル12:14。

第二十二条

私たちは、イエス・キリストが神と神の民との間の唯一の仲介者であることを確認する。私たちは、謙卑と高举の状態でなされたイエス・キリストの預言者、祭司、王としての仲介的役割を確認する。私たちは、キリストが父から召されたこの仲介的職務を遂行するために、聖霊によって油を注がれたことを確認する。²²

私たちは、これまでも、これからも、イエス・キリストの他に神の受肉があったこと、またこれまでも、これからも、イエス・キリストの他に贖罪の仲介者が存在するということを否定する。私たちは、イエス・キリストのみによらない救いを否定する。

²² 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです（一テモテ2:5）。以下の聖句も参照のこと。ヨブ33:23-28; ルカ1:33; ヨハネ1:1-14; 14:6; 使徒3:22; コロサイ1:15; ヘブル1:1-4; 5:5-6; 9:15; 12:24。

第二十三条

私たちは、最も偉大な神の預言者であるイエス・キリストが、預言する主体であり、預言される対象であることを確認する。私たちは、イエス・キリストが、神の御心を啓示・宣言し、将来の出来事を預言し、ご自身で神の約束を成就されたことを確認する。²³

私たちは、イエス・キリストが偽りの預言や偽りの言葉を発したことがあること、または御子をご自身に関する預言を成就することが出来なかった、または将来に成就することができないということを否定する。

23 さて兄弟たち、あなたがたが、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行いをしたことを、私は知っています。しかし神は、すべての預言者たちの口を通してあらかじめ告げておられたこと、すなわち、キリストの受難をこのように実現されました。ですから、悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られます。そうして、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにあらかじめキリストとして定められていたイエスを、主は遣わしてください。このイエスは、神が昔からその聖なる預言者たちの口を通して語られた、万物が改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。モーセはこう言いました。『あなたがたの神、主は、あなたがたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたがたのために起こされる。彼があなたがたに告げることをすべてに聞き従わなければならない』（使徒3:17-22）。以下の聖句も参照のこと。マタイ20:17; 24:3; 26:31, 34, 64; マルコ1:14-15; ルカ4:18-19, 21; ヨハネ13:36; 21:22; 一コリ1:20; ヘブル1:2; 黙示19:10。

第二十四条

私たちは、イエス・キリストが、メルキゼデクの位に等しい、私たちの偉大なる大祭司であり、私たちの身代わりにご自身を完全なるいけにえとし、父の御前で私たちのためにとりなし続けておられることを確認する。私たちは、イエス・キリストが最も偉大な贖いのいけにえの主体であると同時に対象であることを確認する。²⁴

私たちは、イエス・キリストがレビ族ではなくユダ族の出身であるために、私たちの祭司として仕える資格が無いということを否定する。私たちは、ミサの中で、キリストが祭司として、血を流さない方法で、絶えずいけにえとしてご自身を捧げ犠牲となられるということを否定する。私たちは、キリストが祭司になったのは御国においてのみであり、地上では祭司ではなかったということを否定する。

24 キリストは、本物の模型にすぎない、人の手で造られた聖所に入られたのではなく、天そのものに入られたのです。そして今、私たちのために神の御前に現れてくださいます。それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所に入る大祭司とは違い、キリストはご自分を何度も献げるようなことはなさいません。もし同じだとしたら、世界の基が据えられたときから、何度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかし今、キリストはただ一度だけ、世々の終わりに、ご自分をいけにえとして罪を取り除くために現れてくださいました。そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うために一度ご自分を献げ、二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々の救いのために現れてくださいます（ヘブル9:24-28）。以下の聖句も参照のこと。ヨハネ1:36； 19:28-30； 使徒8:32； 一コリ5:7； ヘブル2:17-18； 4:14-16； 7:25； 10:12, 26； 一ペテロ1:19； 黙示5:6, 8, 12-13； 6:1, 16； 7:9-10, 14, 17； 8:1； 12:11； 13:8； 15:3。

第二十五条

私たちは、イエス・キリストが、今もとこしえまでもすべての地上の権力と超自然的な権力に勝る最も偉大な王として治めておられることを確認する。²⁵

私たちは、イエス・キリストの王国が、単にこの地上の政治的な王国であるということを否定する。私たちは、地上の支配者が、キリストに対して説明責任を果たす必要がないということを否定する。

第二十六条

私たちは、イエス・キリストがご自身の全ての敵を打ち勝ったとき、御国を御父の御手に渡されることを確認する。私たちは、新しい天と新しい地において、神はご自身の民と共におられ、信仰者たちはイエス・キリストと顔と顔を合わせて、キリストに似た者とされ、永遠にキリストを楽しむことを確認する。²⁶

私たちは、イエス・キリストによる以外に、人類の希望や救いを見出すべき御名や方法があるということを否定する。

25 すべての敵をその足の下に置くまで、キリストは王として治めることになっているからです（一コリ15:25）。以下の聖句も参照のこと。詩篇110； マタイ28:18-20； ルカ1:32； 2:11； 使徒2:25, 29, 34； 4:25； 13:22, 34, 36； 15:16； ローマ1:3； ニテモテ2:8； ヘブル4:7； 黙示3:7； 5:5； 22:16。

26 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、王国を父である神に渡されます。すべての敵をその足の下に置くまで、キリストは王として治めることになっているからです。最後の敵として滅ぼされるのは、死です。「神は万物をその方の足の下に従わせた」のです。しかし、万物が従わせられたと言うとき、そこには万物をキリストに従わせた方が含まれていないことは明らかです。そして、万物が御子に従うとき、御子自身も、万物をご自分に従わせてくださった方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです（一コリ15:24-28）。以下の聖句も参照のこと。イザヤ65:17； 66:22； ピリピ2:9-11； ニペテロ3:13； 一ヨハネ3:2-3； 黙示21:1-5； 22:1-5。

解説

活用のための
手引き

し
 つの日か、このたった一つの告白が全地に轟きわたることだろう—「イエス・キリストは主です」(ピリピ2:11)。この短い一文の意味するところは、文字に収まりきらないほどに豊かである。まず、イエスがキリストであると告白することは、イエスを「油注がれたもの(the Anointed One)」であると告白するに等しい。すなわちそれは、イエスが久しく待ち望まれた約束のメシアであるという告白である。そしてイエス・キリストが主であると告白することは、イエスが真の神の中の真の神であると告白することである。受肉は最も感嘆すべき御業、驚くべき奥義である。神は人となられた。このお方をイエスという名で呼ぶことさえ、キリストこそが唯一の救い主であると告白することである。イエスはご自分の民をその罪から救うという目的のために、この世に来られたのである(マタイ1:21)。

「イエス・キリストは主です」— これは信条である。最も凝縮された形で、信仰を言い表している。信条は英語でcreedであるが、この言葉はラテン語のcredo、「私は信じる」という言葉からきている。ある人々は、テモテへの手紙第一3章16節を信条と捉えることもできると考える。この考えには二つの理由があるのだが、第一には、パウロが用いている「誰もが認めるように、この経験の奥義は偉大です」(訳注:ESVではGreat indeed, we confess)という表現である。第二に、この一節の言い回しにはリズムがあり、詩的な表現がなされている点である。この一節は、キリストの受肉についての簡潔な要約となっている。

キリストは肉において現れ、
 霊において義とされ、
 御使いたちに見られ、
 諸国の民の間で述べ伝えられ、
 世界中で信じられ、
 栄光のうちに上げられた。(一テモテ3:16)

この聖書的な定式は重要である。初代教会が公会議を開き、信条を作成したのは、信仰告白の新しい方法を生み出そうとしたからではない。彼らはあくまでも、聖書の伝統として確立されたスタイルを受け継ごうとしていたのである。

問題が起こる度に、初代教会は立場を明確にした。さらに、当時の教会の典礼的な必要、つまり純粋な礼拝への欲求が、教会に信条の作成を促したと考える人も多い。これは特にキリストに関する教理(キリスト論)について言えることだろう。イエスの人格と御業に関する本質的な真理は、何世紀にも渡ってキリスト教を特徴づけてきたものである。

新約聖書の著者たちもまた、キリストというお方(Christ's identity)、そしてキリストの御業についての誤った考えと戦ってきた。教会の歴史における初めの数百年ほどは、様々な群れがキリストの真の人性を疑った。キリストの仮現説を唱える人々は、イエスは人間のように「見えた」だけであると主張した。また、他の異端、アリウス主義などは、キリストの真の神性について異論を述べた。この異端はキリストが父なる神に劣る存在であると主張している。その後続く別の群れは、キリストの神性と人性が一つの位格の中でいかに結合しているかについての表現において、誤っていた。初代教会はこのような挑戦や誤りに対応するため、公会議を開き、キリスト教信仰の中心的な真理に関する聖書の教えを要約した信条を作成したのである。これらの信条は、世代から世代へと受け継がれてきた豊かな遺産である。こうして今日、私たちは使徒信条、ニカイア信条、そしてカルケドン信条という財産を得ているのである。これらの信条は、いわば境界線指標として、正統派と異端との間を明確に線引きしている。

これらの信条は、教会を鍛える役割を果たしてきたと同時に、教会を支配される神の恵みの御手により、クリスチャンたちが福音を誠実に宣傳伝えるための指針ともなってきた。これらの信条は、そ

の永続的な価値の証しとして今日も唱えられている。信条は、私たちの神学、そして私たちの礼拝の中心がキリストであることを思い起こさせる。信条は、「聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のために戦う」ことを、教会に勧めているのである(ユダ1:3)。

しかし、これらの信条はキリストの働きにほんの少し触れているに過ぎない。ここに福音が完全に解き明かされているとは言えないのである。宗教改革の時代、目に見える教会に本当の意味での分裂が起こったが、その時に主軸となった議論の焦点はキリストの御業であった。より具体的に言うならば、信仰のみによる義認の教理をめぐる議論こそが、宗教改革の火種となった中心的議題であった。ここから、教会はプロテスタントとローマ・カトリックに分かれている。プロテスタントは信仰のみによる義認の教理(*sola fide*)を主張したのに対し、ローマ・カトリックは、トリエント公会議の決定に従い、義認は信仰と行いの協働によるとし、信仰のみによる義認の教理を否定したのである。宗教改革は、もう一つの問題についても双方の違いを明らかにした。すなわち、イエス・キリストがご自身の教会の、さらには万物の、最高権威者であり、唯一のかしらであるという見方である。

これらを合わせて考えると、初代教会のエキュメニカルな信条と宗教改革の強調事項は、教会が聖書に忠実な福音を述べ伝えるための指針を示している。信条および様々な改革派の信仰告白やカテキズム(教理問答)は、信仰を要約して教え、信仰と福音を明確なものとしている。

「ことばは人となられた:キリスト論についてのリゴニア声明」は、キリストの人格のその御業についての簡潔な声明を今の世代の教会に一そして、神の恵みによって次の世代にも一謙遜に提供しようという試みである。この声明では、エキュメニカルな信条と宗教改革の神学の両者から、過去の豊かさを引き出そうとした。おそらく、この声明とそれに合わせて示した確認と否定の二十六箇条は、キリス

ト論という極めて重要な議題についてさらに議論と考察を深めるきっかけとなるだろう。もしかすると、この声明自体が教会にとっても役立つかもしれない。この声明は、会衆による朗読に適したものになるよう、あらゆる工夫がなされている。私たちの願いは、この声明に出会うすべての人が、「イエス・キリストは主です」と知ることである。

この声明について

この声明は六つの連または節から成る。初めの節は序章であり、ここには、告白する(confess)と喜ぶ(rejoice)という二つのキーワードが含まれている。神は、聖書という書物の中にご自身とご自身の御心を啓示された。それでもなお、そこには神のものとして「隠されたもの」がある(申命29:29)。私たちは、神学に取り組むとき、自分たちの限界を常に意識しなければならない。そのために、私たちはまず初めに福音の奥義と驚くべき御業を告白することから始めるのである。人となられた神という言葉で簡潔に表現されている通り、この声明の第一の焦点は受肉である。キリストの人格から、すぐにキリストの御業へと繋げることによって、キリストの救いの御業を総じて喜ぶことができるのである。

第二節はキリストの真の神性を強調し、キリストを三位一体の三つの位格の中に同等に位置付けている。この節はカルケドン信条から取られた、カルケドンの定式を再述して締め括られている。受肉以降、キリストは永遠に、一つの位格の中に二つの本性を持つお方なのである。

第三節は、キリストの真の人性を強調し、受肉の説明に費やされている。御子は生まれた。御子はインマヌエル、すなわち「神が私たちとともにおられる」、であった(マタイ1:23)。ここで私たちは御子の死、埋葬、復活、昇天、そして再臨を告白している。これらは、受肉の歴史的事実である。

それに対する受肉の神学的事実は、宗教改革の時代に取り戻した洞察をもとにして第四節に説明されている。私たちのために、イエスは完全に従順であられた。イエスは律法を守り(積極的従順)、律法の求める罰を受けられた(消極的従順)。イエスは私たちの身代わりに宥めの供えものとなる、汚れなき子羊となられた。イエスは、全人類が直面している最も差し迫った問題、すなわち聖なる神の怒りに、解決の道を備えてくださったのである。この節は最後に転嫁の教理を宣言している。私たちの罪はキリストに転嫁された(あるいはキリストのものとなった)と同時に、キリストの義が私たちに転嫁された。私たちと神との間に平和があるのは、ただキリストが私たちのためにしてくださったことのみによる。私たちはキリストの義の衣で覆われているのである。

キリストの三職(munus triplex)は、キリストの働きを完結にわかりやすく表現している神学的概念である。預言者、祭司、王という三つの職務は、それぞれが旧約聖書の時代の独立した仲介者的役割を持つ職務である。イエスはこれら三つを一つの位格のうちを持ち、そのすべての職務を完全に成し遂げられる。ここでは、キリストの仲介者としての御業を過去の十字架のみに限定するのではなく、今も父の右の座で私たちのために仲介者としてとりなしてくださるその御働きにも思いを巡らしたい。

結びの節は、イエス・キリストは主です、という一つの、凝縮された信仰告白である。真の神学(theology)はすべて、讃美(doxology)または礼拝に至らせる。それゆえ、この声明はキーワードとなる動詞、ほめたたえる(praise)という言葉で締め括られる。今日、キリストを礼拝することは、私たちの永遠の働きへの備えなのである。

確認と否定の二十六箇条

リゴニア声明の言葉や語句は、キリストの人格とその御業に関する聖書の教えの豊かさを発見し味わうことへの招き、いわばキリスト論への入り口と言えよう。ここからさらなる道しるべとして加えたのが、参照聖句とともにまとめた確認と否定の二十六箇条である。主軸となる聖句は全文を記載し、その他の参照聖句も列挙した。これら二十六箇条は、実に必要不可欠である。これらは、キリストの人格とその御業に関する聖書の教えの、境界線を示すものだからである。

第一条は、序章として、受肉を確認している。第二条はキリストの真の神性を、そして第三条から第五条は、聖書の教える、一つの位格に二つの本性を説くキリスト論を告白している。第六条から第九条は、キリストの真の人性について展開し、第十条から第二十六条は、キリストの人格からその御業へと視点を変える。このテーマは救済の教理の確認から始まり、キリストの三職の説明で終わる。

否定の項目は非常に重要である。この寛容の時代に、ある信念を取って否定することは時流に合わないだろうが、確認と否定の条項は決して横柄な押し付けをしようとしているのではない。むしろ、教会が聖書の教えに沿った、安全で青々とした牧草の上に留まることができるよう、希望をもって示したものである。ヨハネの手紙第二、九節はこう宣言する。「だれでも、『先を行って』キリストの教えにとどまらない者は、神を持っていません」。これは、聖書のキリストの教えより先へ行こうとすること、あるいは神のことばに啓示されているキリスト論の定められた境界線を超過してしまうことを指している。声明文の様々なフレーズから二十六箇条が展開されているように、これらの条項自体がキリストについてのより深い聖書の教えへと導き入れることができるのである。

当然ながら、なぜそもそも新しい声明が必要なのかと尋ねる者もあるだろう。もっともな質問である。そこで、私たちはこの声明を出す

根拠を三つ掲げた。まず、私たちは、教会が古代と現代の挑戦に取り組むことで、この声明が今日の教会の礼拝や教養に役立つと信じている。さらに、私たちはこの声明が、福音の働きに携わる者にとって、真にミニストリーのパートナーである人々を認識するための手段になると信じている。最後に、私たちは教会にとっての試練が間近に迫っていると感ずること、それゆえこの声明が、福音のすべての本質 — 福音の美しさ、その必要性、そしてその緊急性を、私たちに思い起こさせるものとなることを信じている。以下に、これら三つの理由をさらに詳しく紐解いていきたい。

礼拝と教化のために

リゴニアはこの声明をへりくだって教会に捧げる。クリスチャンたちは、初期の頃から何世紀も、教会の礼拝で信条を唱えてきた。この声明もまた、同じ目的のために用いられることを私たちは願っている。なぜなら信条は、水平線のように広がる聖書の教養を探究する、教育のためのツールとして有用であるからだ。さらには、この声明と二十六箇条が、より深く聖書を知り考察するための助けとして教会で用いられることを願う。キリストの人格とその御業に関する教理は、教会のアイデンティティと健康のために不可欠である。教会に集うすべての世代の人々がキリストの人格とその御業に関する正統的な理解を学び、確認を新たにすることがある。私たちは、この声明がその助けになると信じている。

福音の共通の目的のために

特定の教派または教団に属さない教会や団体、ムーブメントなどは世界中で増えており、そこには福音を宣べ伝える多くの働き手がいる。しかし、どこに健全な協力関係・関連性があるのか、見極めるのが難しいこともある。そのような場合に、この声明がキリストにあっ

て共に働く兄弟姉妹を見つけ出し、福音のための共通の努力を結束させる助けとなるだろう。

このような時代のために

大学都市オックスフォードには、トマス・克蘭マー、ニコラス・リドリー、ヒュー・ラティマーなど英国の宗教改革で犠牲を捧げた殉教者たちのための記念碑がある。そこには、我が身が火に焼かれようとも、彼らが認め保持してきた聖なる真理の証人として、ローマ教会の誤りに抵抗し、キリストを信じるだけでなくキリストのために苦しむことができたことを喜ぶ姿が語られている。

彼らはイエス・キリストの福音の聖なる真理を信じ、確認し、保持したのである。この真理の証人となるために、彼らは宣言と擁護を繰り返すだけでなく苦難をも厭わなかった。そして何世紀もの間に、多くの信仰者が彼らのような改革者たちの働きに加わった。現代の欧米諸国にある教会のほとんどは、宗教の自由を享受している。しかし、それがいつまで続くのか。続く保証はないのである。今の世代、あるいは次の世代は、キリストのための苦難に召されているかもしれない。そのために私たちが備えないことは愚かであり、次の世代に備えるよう働きかけないこともまた、愚かである。

確かなのは、これらの真理、すなわちキリストの人格とその御業に関する真理は、それを信じ、確認し、保持し、そのために苦しむ価値のあるものだということである。キリストにこそ、いのちがあるのだ。

キリストが地上に生きておられたとき、群衆がイエスから離れて去って行き、イエスと弟子たちだけが残されたことがあった。イエスはそこで、弟子たちに「あなたがたも離れて行きたいか」と尋ねられた。そこでペテロは、十二弟子を代表してこう言うのである。「主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。私たちは、あなたが神の聖者であると信

じ、また知っています」(ヨハネ6:68-69)。それからしばらく後、十二弟子の一人は疑いを持つことになる。イエスは十字架にかけられ、葬られていた。そこにイエスの復活が語られるが、トマスは疑った。するとイエスはトマスに姿を現された。彼はそこで、キリストの傷に触れる。私たちの罪のために、キリストが耐え忍ばれた、その傷に。そしてトマスはこう告白する。「私の主。私の神よ」(ヨハネ20:28)。
ゆえに、私たちは信じる。ゆえに、私たちは告白する。

